



本日はよくお参り下さいました

7月22日に梅雨明けしてから夏が続いています。皆さん体調を崩されたりしていませんか。天神社の例大祭が目前となりました。今年度は2週目の8月9日・10日です。昔は8月10日と25日に行われて



いましたが、時代の流れとともに、10日直前の土日に行われるようになりました。久里浜天神社の例大祭は、1日目が湯立て神楽・2日目が神輿渡御祭です。1日目の湯立て神楽は境内に設置されたヤマと呼ばれる斎場の中で、神職が五座のお神楽を奉納します。四座目の笹湯では、釜に沸かした熱湯を笹でかき混ぜ、参列者に向けて、お湯をふりまくということを行います。この湯をかぶると、一年間無病息災でいられるといわれています。熱湯なのでこわがる方もいらっしゃるかもしれませんが、火傷するほど熱くないので心配はご無用です。また、五座目の剣舞は天狗の重々しい舞にモドキと呼ばれる道化役の滑稽な動きが参列者の笑いを誘います。ご利益を戴きながらお子様からご高齢の方まで楽しめる神事ですので、皆様お誘い合わせの上お越しくください。権禰宜道子

8月

1日月首祭 月の初めの恒例祭祀。小祭。

9日・10日 久里浜天神社例大祭日程

9(土)天満宮祭	14:00~ 例祭斎行 於 社殿
	15:00頃 湯立神楽奉納 於 境内
	19:00~ 奉納踊り(盆踊り)於境内
10(日)八雲祭 (神輿渡御祭)	08:00~ 神輿出御祭
	09:00~ 神輿宮出し
	21:00頃 神輿宮入りの後、還御祭



10(日)八雲祭
(神輿渡御祭)



例大祭限定神札のご案内

天神社では、毎年例大祭限定の授与となる、天満宮と八雲大神のおふだをご用意しています(初穂料各300円)。無病息災、身体健全を祈願したおふだです。ご希望の方は、お早めに天神社(電話 046-835-3703 担当 権禰宜早川)までご連絡下さい。

15日月次祭 月の半ばの恒例祭祀。小祭。

日本神話の世界 全十一回

第5回 「三貴子の誕生と 須佐之男命の追放」

須佐之男命の追放

黄泉の国からお帰りになった伊邪那岐命は「自分はいやな見る目もいとわしい国に行ってしまった。禊をして身を清めなくては」と仰せになり、筑紫の日向の橘の小門(おと)の阿波岐原(あわぎはら)にお出ましになり禊をなさいました。伊邪那岐命が身に着けていたものを外す時に、多くの神々が生まれました。そして裸になった伊邪那岐命が禊をすると、黄泉の国のケガレから、人々に禍いをもたらす禍津日(まがつひ)の神や、その禍を直す直毘神(なおびのかみ)などが生まれます。最後に左の御目を洗うと、太陽に象徴される、天照大御神が生まれ、右の御目を洗うと、月に象徴される月読命(つきよみのみこと)が生まれ、御鼻をお洗いになると、海に象徴される勇猛迅速に荒れずさぶる神、建速須佐之男命が生まれました。この時、伊邪那岐命は大変お喜びになり「自分は子をたくさん産んできたが、その果てに三柱の貴い子供を授かった」といって自らが付けていた首飾りを天照大御神に授け「お前は高天原を治めなさい」と委任されました。次に月読命に「お前は夜の世



界を治めなさい」と委任され、次に建速須佐之男命に「お前は海原を治めなさい」と委任されました。しかし、須佐之男命だけは海原を治めず、嵐のように泣きじゃくっていました。伊邪那岐神が心配され「なぜお前は委任した国を治めず泣いてばかりいるのだ」と問われました。すると須佐之男命は「私は母上の国、根の堅州国(かたすくじ)に参りたいのです。だから泣いています。」と答えました。そこで、伊邪那岐神は大変お怒りになって「それならお前はこの国から出てゆけ」と宣言され、須佐之男命を追放してしまいました。参考文献『神話のおへそ』神社本庁監修(株)扶桑社発行 / 『現代語古事記』竹田恒泰著(株)学研パブリッシング発行

天神さまの豆知識

神輿渡御とは

全国の神社では多くの祭祀が行われていますが、その中でも、神輿の渡御は担ぎ手はもとより、大勢の見物人までが酔いしれる勇壮な神事です。この次第は神輿にご分霊を遷し、神社を出発する「宮出し」に始まり、途中御旅所に立ち寄りながら氏子地域を練り歩き、再び神社に戻って神輿から御神座へお還りいただく「宮入り」となります。神輿を通じて、神と人とが一体となり、活気が出ます。神様もこうした人々の姿を見てお喜びになり、渡御する地域の各家々にご神徳を与えて下さると信じられています。参考文献『神道いろは』神社本庁教育学研究所監修(株)新報社発行